

● シリーズ 私の見た日本 Vol.193

中国と日本の地方のまちづくり

沈 琴(チン キン)

中国安徽省生まれ。
2019年新潟大学自然科学研究科建築専攻博士前期課程
修了、同年光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所入社。

日本に来るきっかけ

日本に初めて来たのは、2014年の春だった。私は交換留学生として新潟大学でまちづくりについて学んだ。それ以来、日本の地域のまちづくりに興味を持ち、2016年同大学の大学院生として改めて日本に留学した。大学院修了後、光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所に入社し、現在日本に来て4年が経った。本稿では、日本と中国の地域性の違いや共通点からまちづくりの手法を分析し、今後のデザインに活かせるものを追究した。

日本と中国のまちづくりの比較

今回、私の出身地である中国の安徽省(アンキョウ)宣城(センジョウ)市にある水東(スイトウ)町(図1)と新潟県長岡市栃尾町を対象として、伝統的住居における地域の特徴と共通点を考察した。

水東町の総人口は3.2万人(2016年)、栃尾町(2006年1月1日長岡市に編入)の総人口は1.87万人(2015年)で、両方とも人口の少ない町だが、それぞれに特色がある。

水東町は四季があり、日本の東京の気候に近く、一年を通して平均気温は15.6℃で、冬でも雪はさほど積もらない。街並みは図2のように、平入の長屋が通りに沿って並び、門坎(メンカン)と呼ばれる空間が住居の手前

にある。住民たちはそでご飯を食べながら、近所の人と会話をしたり、子どもたちは友達と遊んだりする。さらに、門坎で中国伝統楽器である二胡(ニコ)を弾く人もいて、近所の人たちが集まり小さな演奏会も開かれる。

水東町の住宅は並んで建てられることから、室内の採光と風通しが悪く、門坎が地元の人々の交流場所になった。また、水東の人々のもとと対人コミュニケーションを好む文化もこのような空間をつくり出した要因の一つであると考えられる。

水東町はかつて水陽江に主要な航路が通っており、安徽省東南部の重要な水運の埠頭と物資の集散地であったため、現在でも川が残っている。経済の発展とともに、人々の生活は向上し、水道水が使えるようになったいまもなお、あえて家の中ではなく、この川の洗い場(図3)で野菜や服を洗い、世間話や近所の人々との交流を楽しんでいる。

一方で栃尾町(図4)は水東町と比較すると、冬は寒く雪が積もる。そうした環境もあり、冬の歩行者の通路を確保するため、住民の私財で軒からやや深めに飛び出させた庇、「雁木」(図5、6)を建てたのだ。現在栃尾町では、道路側に面した雁木の空間を商店の一部として機能させ、お店の入口外にも商品の展示(図7)ができるようにしている。また、飲食

店では雁木の空間に椅子を置き、待っている人が座れるようにしている。

1997年には新潟大学、地域住民、長岡市の協働による「雁木プロジェクト」が始まった。これは、学生たちが地域の人にヒアリング調査を行い、新しい雁木のデザインを考えると、雁木の模型を作成後、地域の人に説明し、選ばれた雁木のデザインを現場で学生と職人が協力して施工する。このプロジェクトによって、学生と地元の人とのコミュニケーションが増え、雁木やまちの文化への理解も深まっている。栃尾の街並みを紹介する情報スポットである、まちの駅「栃尾表町雁木の駅」は、憩いの場としても利用されているが、これまでに作成された雁木の模型の展示を見ることができる。このように、雁木を通してまちの人同士、まちの人と観光客、まちの人と学生とのつながりが形成されている。

もう一つ紹介したいのが、「とちお町めぐり雁木あいば」という、毎年5月3日に開催される栃尾の雁木の街並みを活かしたイベントだ。「あいば」とは、栃尾弁で「歩こう」という意味で、雁木の下を歩いて美味しい食べ物を食べながら、クイズに答えると栃尾の特産品をもらうことができ、地域の子どもたちにも人気がある。イベントを通じて地域の人々のつながりもより一層深くなっている。



図4(左上)／栃尾町の街並み 図5(上中)・図6(下左)／栃尾町の雁木 図7(上右)／雁木での商品展示 図8(下右)／新潟春節祭

地域イベントによるまちづくり

水東町の門坎空間や川の洗い場、栃尾町の雁木はまちにあるハード面から賑わいを創出するものだが、ソフト面からのまちづくりについて新潟市古町の「にいがた食の陣」を例に述べたい。

これは、新潟特産の野菜などを使って寒い冬の時期にみんなで一緒に温かいものを食べようというイベントで、豊富な地元の食材を活かし地域の魅力を全国に広めている。

私が参加した2017年冬の「にいがた食の陣・当日座」では、開催25周年を記念して「米王国=米文化=米の陣」をテーマに、「新潟春節祭」(図8)も同時開催され、約24万人が新潟市古町に訪れた。毎年テーマに合わせた多種多様な温かい料理を食べることができ、この時もイベントに訪れた人々は楽しんでいる様子だった。実際に新潟の人だけではなく、県外の人や外国人も訪れるようになり、まちの活性化につながっている。

まとめ

水東町、栃尾町、新潟市古町のまちづくりを考察すると、共通点がある。それは各々の文化・環境による地域性を活かした交流の場をつくることによってまちづくりを行っている点である。水東町では、地元の人々のコミュニケーションを好む文化と住宅環境が影響して、門坎や川の洗い場でのコミュニケーションがまち特有の光景となっている。栃尾町では、雪よけのためにつくられた雁木を利用した空間づくりや雁木そのものをつくるプロジェクトによってまちが活性化した。また、新潟市古町では豊富な地元の食材を活用した「食の陣」など、イベントがまちに賑わいをもたらしている。その地域性には既存の文化や環境などの要素ももちろん関係しているが、住民たちの主体性がまちづくりにとっては重要である。つまり、住民やまちづくりに関わる人々が「街をよくしよう」という志をもち、具体的には豊かな生活を送ることができるような空間

づくりやイベントを積極的に計画することが大切なのである。また、外からまちづくりに参加する人も、そのまちのため、そのまちの人たちの立場になって考えることが、良い空間をつくるうえでは非常に必要なことである。例えば、雁木プロジェクトの学生たちはそこに暮らす地元住民ではないため、雁木をデザインするときには、雁木や使う人々の住まわちを理解するためのヒアリング調査は欠かせない。

今後もデザインをする際、まちの文化や環境など地域性を深く理解したうえで思考し、提案していくことを大切にしていこうと思っている。単純に目を引くだけのデザインではなく、まちの抱える課題を解決し、まちへ賑わいをもたらす付加価値のあるデザインをつかっていきたい。



図1 水東町鳥瞰



図2 門坎(メンカン)空間



図3 川の洗い場